

私たちには「のさらん福」まで 求めてはいないか？

評＝岸澤美希（民俗学研究者）

本書は、日本観光文化研究所に所属して全国各地を取材した民俗写真家・須藤功さんの著作だ。「読める写真」を撮ることを心がけているという須藤さんの写真は、失われつつある山の暮らしと信仰をさまざまと伝えてくれる。

さて、書評を依頼された私の専門は民俗学だが、狩猟には疎い。

平成のはじめに都市近郊農村で生まれ育った私の暮らしの中に狩猟の情報は皆無だった。だから、研究者というよりも、現代を生きる一生活者として本書の大部分を読ませてもらった。ここではその率直な感想を綴らせていただく。

本書には、山村での民俗芸能と神事、狩猟、焼畑を中心とした農業、食生活が7章にわたって描かれている。都市化の進む現代でも日本列島はその約7割が山林で、

日本人は稻作に適した平野部だけで暮らしてきたわけでは決してない。山村では畑作をし、木を育て、炭を焼き、木の実や獣や魚も糧としてきた。そんな山の暮らしは、高度経済成長期を経て、産業構造の転換や都市部への人口流出によって衰微しつつある。

（

）

「のさらん福は願い申さん」とは、宮崎県の山奥の椎葉村で狩猟儀礼を守り伝え、2023年に93歳で亡くなった尾前善則さんの言葉だ。のさらんとは受けられないこと、福とは獵師にとってイノシシとシカを指す。つまり、山の神が授けてくれる獲物だけで十分だということ。山村の人々は、完全には制御できない自然の恵みに自らの欲望を沿わせて生きてきたのだ。

翻つて現在の暮らしはどうだ。

多くの人は動物を解体する感触も

においも知らない。工場で加工された食品を食べ、しかも残す。限られる資源を、あたかも無限のように浪費しながら生きている。

伝承されてきた山村の暮らしは、人間の生命活動の本質を再確認させてくれる。自分が仕留めた動物の命は、どれだけ重いだろう。持続可能性が喫緊の課題となつている今、大切なのは求めすぎないこと、命を無駄なくいだすことではないか。改めて、自分たちの足元を見直したい。

『山と獣 焚畑と祭りにみる山村の民俗誌』

須藤 功 著

農文協 2750円（税込）

139